

# 青年海外協力隊員レポート

平成15年7月から青年海外協力隊員の看護師として、マラウイで活躍されていた酒井康子さんが2年間の派遣期間を終え、帰国されました。派遣国での体験と感想をご紹介します。

## マラウイ・レポート①

### Warm Heart of AFRICA

(アフリカの温かき心)

酒井康子 (西古泉)

照りつける太陽、風に舞う砂埃と大地の香り、リズムカルな音楽と人々の笑い声、そしてどこからともなく聞こえてくる動物たちの鳴声。

Warm Heart of AFRICA(アフリカの温かき心)と呼ばれているマラウイ共和国(以下マラウイ)で、私は青年海外協力隊の看護師として2年間活動させていただきました。

皆さんはこのマラウイという国をご存じでしょうか？

実は私も協力隊の合格通知を見るまで、この国の存在を知りませんでした。

マラウイはアフリカ大陸の赤道より南部に位置し、タンザニア、ザンビア、モザンビークに囲まれた小さくて細長い国です。

国土は日本の3分の1。北海道と九州を合わせたぐらいです。さらに国土の5分の1が湖であり、

湖の国とも呼ばれています。

標高が全体的に1000m前後の高地であるため、アフリカの中でも涼しくて比較的過ごしやすい所です。人口は1200万人。

主要産業は農業で、煙草や紅茶、砂糖、綿などが主な外貨収入源となっています。



しかし、洪水や旱魃によりこれらの農産物は打撃を受け、望むような



▲出産後の母親を看護する酒井さん

経済成長を遂げることができません。

天然資源や観光資源も乏しく世界の中でも極貧国で、ほとんどの人が一日1ドル以下の生活を送っています。

電気・水道・通信・交通などの社会基盤は整っておらず、保健・医療・福祉に至っては課題が山積みです。

安全な水が飲めなかったり適切な医療が受けられなかったりして、5歳までに亡くなる子どもは1000人中183人、HIV/AIDS感染率は報告されているだけで15% (実際はこの3倍以上と推定されている)、平均寿命は37・5歳(乳幼児の死亡率が高いため全体の平均寿命を下けている)と厳しい現実があります。

しかし、人々はその中でも笑顔絶やさず、明るくたくましく生きています。



▲燃料用の木の枝を肩や頭に載せて家路につく人々

首都の一部には裕福な人々が近代的な生活をしていますが、多くのマラウイアンは農村部で土壁と草の屋根で作られた家に住み、井戸まで水を汲みに行き、食事に使う薪を拾い集めると言った昔ながらの生活をしています。

私も現地の人とできるだけ現地の人に近い生活をしたと思います、土壁の家ではないものの、2年間電気・水道のない生活をしていました。水汲みは主として女性の仕事となっており、小さな子どもまでもが頭に15〜20ℓのバケツを乗せて500m〜1kmの道程を一日に何往復もします。

私も何度か運びましたが、重くてバランスがとれず、家に辿り着いた時には半分の量になるほどこぼしてしまい、重労働だとあらためて実感しました。